

抜歯の判断基準とインプラント治療の選択基準

穂積 英治 (愛知県小牧市開業)

インプラント治療は補綴治療になくってはならない選択肢の一つになったが、依然としてネガティブなイメージが患者のインプラント治療選択の妨げになっている。その大きな理由は外科的侵襲を伴う治療であることと、高額な治療費を必要とすることである。またインプラント周囲炎の問題や、インプラントと天然歯が共存する歯列でのインプラントの追加治療、患者の高齢化に伴う健康状態や経済状態の変化等、今後も様々な問題が起こってくるのが予想される。インプラント治療は本来、喪失歯や保存不可能な歯に対して行われる治療法であるが、インプラント治療の成功率や予知性の向上で、天然歯よりインプラント補綴の方が予後良好であると信じる臨床家もおり、抜歯か保存かの判断やコンベンショナル補綴かインプラント補綴のどちらを選択するかは臨床家自身の判断によるところが大きい。

一番重要なことは患者、術者双方にとって後悔のないように、慎重にインプラント治療の介入時期とその補綴設計を考えること、そして患者の一生涯を通じて、インプラントが最大限の効果を発揮出来るように、患者のライフステージに応じたインプラント治療が求められる。

近年、インプラント治療の予後やペリオ、エンド、補綴の予後に関するシステマチックレビュー論文が多数投稿されるようになり、治療計画の判断材料に非常に有用であると思われる。今回の発表では、最近の文献から推察される傾向と当院でのインプラント治療と従来補綴治療の選択に関するコンセプトをお話ししたい。